転生した異世界で金を荒稼ぎ

ビフィズス菌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
転生した異世界で金を荒稼ぎ

【Ｎコード】
Ｎ５５２７Ｚ

【作者名】
ビフィズス菌

【あらすじ】
高校生のお小遣いよりも月収が安く、
その上毎日１６時間労働という過酷な人生を歩む俺は
ハードブラック会社に遅刻しそうになり、
車にはねられて死んでしまった。
しかし、死んだ俺を待っていたのは天国でもなく、地獄でもなく、
魔物がうようよいる異世界であった。
異世界で金を稼ぐのが目的のダメ人間な俺は
怪しげな魔術師に魔法を強制的に教えられ、

そのまま異世界で生活することになる。
果たして異世界生活を満喫することはできるのだろうか？・・・

俺、異世界に転生する（０メイル）（前書き）

唐突に思いついたものを書いてみました。
更新頻度はあまり多くないと思いますが
ぼちぼちＵＰしていきますので宜しくお願いします！
ちなみにタイトルの（）の中の数字は
小説名の『金を荒稼ぎ』にちなんで今の残金をあらわしてみました。
もちろん一話目なんで０メイルです。

俺、異世界に転生する（０メイル）

俺は斉藤広幸（さいとうひろゆき）。会社員だ。
俺の勤めている会社は給料が極端に安い。
ハンパじゃない。月収が高校生のおこづかいよりも少ない。
その上、上司はがみがみうるさくてストレスが溜まる。
まあここは１億歩譲って我慢してあげよう。
しかし、俺の一番気に入らない点がある。それが・・・
重労働だ。俺の会社は一日１６時間もの労働をする。
なのにこの安い給料なんだ。給料を６０倍くらいにしてもらいたいものだよ。

そして俺も俺だ。顔は中の下、運動神経０。通知表も今までずっとＡＬＬ１だった。
恋愛経験ももちろん０なわけで、俺はダメ人間の代表と言っても過言ではなかった。

そんなある日、俺はハードブラックな会社に遅刻しかけた。
俺は非常に焦っている。それもそのはずだ。
ハードブラック会社は１秒でも遅刻した瞬間に、その月の給料が０になる。
いくら少ないとはいい、ただ働きだけはごめんだ。

俺は朝食を食わずに家を飛び出した。
というよりは食べたかったが冷蔵庫にはなにもはいっていなかった。

「あと３分！」俺は更に走るスピードを上げた。
しかし、俺は運動音痴だ。足の速さも小６と変わらないくらいの遅さだ。

俺は自分の足の遅さに嘆きながらも走り続けた。
「あと一分！！」やっと会社が見えてきた。
しかし会社にたどり着くまでには大きな壁がある。
横断歩道だ。ここの信号は一度タイミングを逃すと、１分くらいは青に変わらない。
俺がたどり着いた頃には既に赤に変わっていた。
「ちくしょおおおお！！」俺は何も考えずに信号無視をした。
「ぎゃあああ！！」俺は案の定車にはねられた。
いや、俺は車にはねられることを願っていたのかもしれない。
だんだんと意識が薄れていく。俺は目をつぶった。
――――――８月２１日。斉藤広幸、死亡――――――

「・・・・本当にこんな人生の終わり方でいいのですか？」どこからか声が聞こえる。
俺は目を開くとあたりは真っ暗であった。
すると、闇の中から青いマントを着て杖を手にしている一人の男が現れた。
「あんたは・・・・？」
「私は魔術師、簡単に言ったら魔法使いと言ったところでしょうか？」男は言う。
「は、はい？」俺は聞き返した。
それもそのはずだ。魔術師？魔法使い？そんなものが世界のどこにいるというんだ。

いるわけない。あれは物語上の話であって実在するはずなんてないのだ。

「おや、信じられないという顔をしていますね。」魔法使いは笑いながら言った。

「おいおい、そんな奴いるはずないんだよ。大人をからかうのもいい加減にしろ」

「それがいるんですよ。少なくともこの世界にはね」

「一体どういうことですか？」俺の頭の中で？のマークが渦巻く。

「簡単に話を説明しますね。まずアナタはこの前車にはねられて死にました。
そして、本来ならそこで物語終了というところですが、作者はそこまで甘くないのです。
あなたはもともとの世界ではクズ人間、ゴミ人間、生きる価値のない人間・・・
我々はそのような生きる価値の無いクズ人間にチャンスを与えるのです。
もしアナタがもう一度人生をやり直したい、と願うのであればそれを叶えてあげます。
そう、我々の住む世界、異世界で！」

「・・・・。」俺は全く理解できなかった。

「おやおや、異世界が何かわからないようですね。
異世界とはアナタが前まで住んでいた世界とはかけはなれたものです。

スライムやドラゴンなどの『魔物』が世界にうようよいたり、
魔術師、剣士、盗賊などなど色々な職業をやっている人たちが
魔物を討伐したり、アイテムを採取したりと『クエスト』をこなして、
その報酬金で生活しているのです。どうですか？あなたの勤めていたブラック会社より簡単で大量に金稼ぎができますよ」魔術師は言う。

「なるほど・・・しかし俺が異世界にいきたくないと言ったらどうなるんだ？」

「それもアナタの判断です。まあその時はアナタをそのまま死後の世界へと送りますがね」

俺は考え込んだ。今まで生きていてろくなことはあったろうか？
もしこのまま異世界に行ったとしても楽しく生活していけるのだろうか？
俺は考え込んだ。・・・そして結論をだした。

「俺は異世界で金を荒稼ぎしたいんだ。だから異世界に行くことにする。」俺は言った。
実際、俺はこの世界を通して自分を変えようと思ったのだ。

「わかりました。それでは目をつぶってください。
そして目を開けたときには広い草原がある場所にあなたはいるでしょう。
そこでアナタは私を見つけ出して話しかけてください。」そう言い残し魔術師は消えていった。
「これから俺の第二の人生が始まる・・・」俺はそのまま目をつぶった。

今から俺の異世界での人生が始まるのだ。――――――――――

――――――――――

目を開けると俺は魔術師の言ったとおり、草原にいた。

「ここはどこだ？」俺は魔術師を探し始めた。

俺がしばらく草原の周りを捜索していると小屋のような場所を見つけた。

「お待ちしていましたよ」魔術師はその小屋からでてきた。

「では早速異世界について詳しく説明しますね。
この異世界で生活をしていくに働かなくていけません。
しかし働くといってもそんな簡単にはいきません。
ギルドに登録し、そのギルドでクエスト受けて、魔物を倒さなくてはいけません。
そこでアナタにはこれから私と修行してもらいます。
あなたが異世界で生活できるようになったら私がいいギルドを紹介します。
そこでアナタは生活をしてもらいます。まあ私の修行を乗り越えられたらですけど」

「おいおい、そんな面倒なことするんですか」俺は呆れた口調で言った。

「じゃあ早速炎の魔術を習得する修行を始めましょうか」魔術師は俺を完璧スルー。
そして魔術師は俺の腕を掴んだ後、なにかの呪文を唱え始めた。

次の瞬間、俺は先程までいた草原とは全く違う場所にいた。
そこは、周りを崖に囲まれており、ごつごつした岩が転がっている場所だった。

「では、早速修行を始めます」魔術師は右手をだした。

「炎の精霊よ、我の体に力を示せ！ファイアボール！」
魔術師の右腕から炎がでてきて、球体を作り出す。
その炎の球体を魔術師は崖の方に投げた。
すると、崖の上にあった大木に直撃し、大木が折れて炎が木に移った。
あっという間に勇ましかった大木はただの切り株と炭になってしまった。

「どうです？簡単でしょ？」

俺、異世界に転生する（０メイル）（後書き）

感想・評価などなどお待ちしています！

俺、初勝利する（３３０００メイル）（前書き）

今回は、色々は技を覚えた広幸が
初めて魔物と戦う話です。
ちょっとギャグも入れてみました！

俺、初勝利する（330000メイル）

「どうです？簡単でしょ？」魔術師はニヤリと笑い言った。

「簡単じゃねーよ！」俺はツッコミを入れた。

「まあまあそんな焦んなくても一から教えますから」魔術師は俺の怒りを抑えるように言った。

――――こうして俺と魔術師の修行は始まったのだ・・・――――

「ハァ・・・ハァ・・・」

「凄い集中力と頭の回転力・・・アナタは本当にダメでクズな生きる価値のない人間だったのですか？」魔術師は言う。

「まあ集中力の持続はハードブラック会社で鍛えられましたから。それと俺のことをダメでクズな生きる価値のない人間って言うのやめてくれます？」

「冗談ですよ、冗談。でもここまで習得が早いのは予想外でした。」そう、俺は魔術師のスパルタな指導の元、いくつかの魔術を習得したのだ。

・ファイアボール

手のひらに炎の球体を作り出し、相手に投げつける攻撃魔法。

俺の場合、チャーハンがぎりぎり炊けないほどの火力。当然敵は焼き殺せない。

・アイススピア
手のひらに鋭利な氷を作り出し、相手に投げつける攻撃魔法。
俺の場合、つららとほぼ変わらない。

・イナズマアロー
雷の矢を形成し、相手に飛ばすことで雷撃を与える攻撃魔法。
俺の場合、乾電池一本分と同じくらいの電流・電圧。

・ウォータードリル
水を激しく回転させ、相手の体を削る攻撃魔法。
俺の場合、水洗トイレと変わらない回転力。

「・・・なんか俺の技全部カスくないですか？」俺は魔術師に聞く。
「そりゃそうですよ。あなたはまだ異世界に入って3日間しか経ってないじゃないですか。
魔力も戦闘を何度もしないと上がりにくいですし、それにあなたはダメ人間ですよ？
そんなダメ人間が異世界に来てチートキャラになるなんて作者が許してくれると思います？」
魔術師は冷静に言った。その口調のせいで、俺のガラスのハートが粉々に割れた。

――――それからも、俺の魔術師の修行は1週間程続いた。――――――

「ハァ・・・・ハァ・・・」

「もうだいぶ安定して魔術を使えるようになりましたね。
じゃあそろそろ実戦と行きましょうか。」魔術師はそう言い、俺の

腕を掴んだ。
そして、俺と魔術師は前にいた草原へと移動した。

「じゃあ早速戦闘を始めましょう。ルールは簡単。
この草原に『ブルースライム』という、体が青い色の典型的なスライムが生息しています。
そのスライムを倒してきてください。
そうすればあなたを一人前の魔術師と認定して異世界の本当の舞台へと連れて行くことを約束しましょう。」

「ちょっと待ってください！俺まだそこまでの魔術は使えないですし・・・
魔術だって、日常生活を支える程度の貧弱なのしか使えないですもん」

「まあ頑張ってください」魔術師は人事のように俺の本音をスルーしやがった。

「まあやるしかないよな」俺はしょうがなく魔術師の言う通りにブルースライムを討伐しにでた。

「どこにいるんだろうか？」俺は草原をくまなく捜索する。
ちなみに視力は両目ともにＡ（２，０）だ。ダメ人間な俺の唯一の自慢できるところだ。

そうこうしているうちに俺はお目当てのブルースライムを見つけた。
「不意打ちなら勝てるかもしれない！」俺は卑怯な手を使う。
なぜなら自分が勝つためなら手段を選ばないクズ人間だからだ。

「氷の精霊よ、我の体にその力を示せ！アイススピア！」

俺の手のひらに何本かのつららのようなものが出来上がる。
俺はそのつららのようなものをブルースライムめがけて投げつけた。

つららは奴の体に突き刺さる。
もちろん全くといっていいほどダメージを与えられなかった。
というより、俺のつららの完敗だ。あたった瞬間に、さきっちょが折れてしまった。

「グギギガ！！」スライムは俺の存在に気付き、勢いよく突進してきた。

スライムの発した鳴き声はあまりにも気持ち悪く、
俺の中の貧弱でかわいらしいはずのスライムのイメージがぶち壊された。

「痛っ！」スライムの突進がモロに俺にＨＩＴした。
だけども所詮はスライム俺と同じく雑魚キャラだ。俺は少しよろけただけだった。

「やっぱり、貧弱魔法じゃ倒すことは不可能か・・・」
俺は考え込んだ。自分の貧弱魔法でもあいつを倒せないかと。
そして俺はある方法を考え出した。早速準備にとりかかる。

「こっちまで来い！」俺はスライムから全速力で逃走した。
さすがにスライムは鈍足だった。小６並の俺の速さにも追いつけていない。
そして、俺はスライムとの距離をとった後、地面に向かって魔法を使った。

「水の精霊よ、我の体にその力を示せ！ウォータードリル！」

俺の手に空気中の水蒸気が集まり始め、できた水が手の周りを回転し始める。
そして地面に手を押し付けると、地面がだんだん削れはじめた。
そして、ある程度の大きさの穴を作り上げた。

スライムはだんだんと迫ってくる。
「もう時間がないな・・・」俺は手にまとわりついている水を穴へと移した。
穴が水で満杯になる。そして、そこにスライムが飛び込んできた。

「グガガ?」スライムは水たまりの中に入った。

「今だ！雷の精霊よ、我の体にその力を示せ！イナズマアロー！」
俺の手のひらに雷の矢が形成された。その矢を俺は、水たまりへと投げ込んだ。
「グガガギガギ！！」スライムは感電した。
いくら乾電池並みの電流だったとはいえ、水は電気抵抗が少なく、スライムに電流がよく通る。

一瞬でスライムがクラゲのように水面に浮かび上がった。

「やったぁー！！俺の初勝利だぁぁ！」俺は嬉しさのあまり歓喜した。
そして俺はクラゲ化したスライムを掴んだ。
「うわぁー・・・なんかぬめぬめしてて気持ち悪い・・・」
俺は初めて触るスライムの感触に嫌悪感を覚えた。
しかし、我慢して持ちながら魔術師の方へと向かっていった。

「持ち帰りましたよ、はい。」俺は魔術師にスライムを見せた。

「おお、おめでとうございます。やはりあなたならできると思ってましたよ。
・・・・・こ、これは！？」魔術師はスライムを見て驚いた。
「どうしたんですか？」
「このスライムは、どうやら青魔石を持っているようですね。
ほら、これを見てください。」魔術師はスライムを八つ裂きにして中の臓器をとりだした。
「何してるんですか！？気持ち悪いにも程がある！」俺は絶叫した。
「まあまあ、ほら、心臓の中に青い石のようなものがありますよね？
これが青魔石というブルースライム特有の産物です。
この青魔石は売ると、お小遣い程度は稼げますよ。今回は私が買い取りましょう」
魔術師はそう言って俺に３０００メイルを差し出した。
※メイルというのはこの異世界共通のお金だそうです。
１メイル＝約１円と考えてください。
「こ、これは！？俺の月収より高い！・・・」
「どんだけあんたの会社の給料低かったんですか！」魔術師もさすがに驚いたらしい。
「そんなことはさておいて、これよりあなたを異世界の本当の舞台へと送りたいと思います。
あ、卒業祝いに色々とプレゼントを用意しましたよ。」魔術師はそう言って袋を差し出した。
そして俺は腕をつかまれ、またもや転送された。

――――――――――――――――

俺が目を開けると、そこにはたくさんの人がいて、賑わっている街であった。
中には色々と入っていた。それぞれの物品に説明書のようなものがついている。

・3万メイル
このお金で宿屋に泊まってください。

・ヒュペノイドコールス
あなたの住んでた世界でいう、携帯電話と同じようなものです。
なにか質問等ありましたら、電話してください。

・女性用下着
あなたの住んでた世界でいう、パンティと同じようなものです。
きっとこの先あなたを助けてくれると思います。

「いらねぇわ！なんの役に立つんだよ！」俺はツッコミを入れた。

・森羅万象携帯用図鑑
あなたの住んでた世界でいう、ポ●モン図鑑と同じです。
戦った相手の情報、産物や、アイテム、地図、などなど
多彩な機能を持ち合わせた高性能なアイテムです。
こいつでポケモンゲットだぜ！

「なんか小説の趣旨変わっちゃってるよ！」俺はまたもやツッコミを入れた。

そうして中身の物品を全部確認し終えた。
あと、もう一つ中に手紙が入っていた。

「広幸君へ、今君がこの手紙を読んでいるとしたら君は賑わっている街にいったところでしょう。
今あなたがいるところはブロンダ街です。
そこにかつて私の相棒であった男の勤めているギルドがあります。
彼には君の事を説明しているので、ギルドに登録させてもらえると思います。
そこで、ギルドに向かってください。そして、登録をしてください。
場所はポ●モン図鑑・・・じゃなくて、森羅万象携帯用図鑑に掲載されています。
では、よい異世界生活を」

「なるほどな・・・これか」俺は図鑑を取り出した。
そしてギルドの方へと走り出していった。

――――目線：魔術師――――
あれほどまであの男ができる奴だとは思っていませんでしたね。
やはり私の見込んだだけの奴ではありました。
この先、あのギルドの奴らと仲良くできるといいんですが・・・
まあ私はアナタの生活を楽しませていただきますよ・・・広幸君

◆◇◆◇◆◇◆◇◆
残高：０メイル
収入：３３０００メイル
支出：０メイル
――――――――――――――――

合計：３３０００メイル

◆◇◆◇◆◇◆◇◆

俺、初勝利する（３３０００メイル）（後書き）

感想・評価などなどお待ちしています！

俺、ギルドに登録する（３０００メイル）（前書き）

今回は広幸がギルドに登録をするお話です。
早くも美少女キャラが登場しました。
恋の展開も考えていかねば・・・

俺、ギルドに登録する（３０００メイル）

「ここが魔術師の言ってたギルドか」俺はギルドにたどり着いた。
ギルドは３階建てぐらいになっており、大きく「ＰＵＮＩＳＨＭＥＮＴ」と書かれている。
ちなみにＰＵＮＩＳＨＭＥＮＴと言うのは、『罰』という意味だ。
なんとも気味の悪い名前だな。
とりあえず俺はギルドの中に入っていった。
中は酒場のようになっており、壁のボードにはびっしりとクエストが貼られていた。
俺は周りの奴らに奇妙な目で見られる。どうやらあまり歓迎されてないらしい。
俺は周りの目を気にせずに、バーカウンターの方へと歩いていった。
「何を飲みますか？」バーテンダーは聞いてくる。
「いや、ちょっとギルドに登録したいんだが・・・」俺はそう言った。
すると、周りの奴らの目の色が豹変し、みんな寄ってきた。
ちょっと気味が悪いと思いつつも、俺はその場に立ち止まっているとその中から一人が話しかけてきた。
「おい、お前ここをどこだと思っているんだ？」そいつは言った。
「いや、普通にただのギルドだと思っているけど・・・」俺は普通

に返答した。

「ふざけてんじゃねぇ！！クソガキが！」俺はそいつに殴られた。
周りの奴らが止めにかかる。俺はフラつきながらも、バーテンダーに聞いた。

「なんであいつ怒っているんですか？」バーテンダーは答える。

「しょうがないですよ。このギルドの奴らは気性が荒くてね。
特に今のやつ、ペスカは誰よりも新人が嫌いなんですよ。
それより、本当にこのギルドに登録していいんですか？
まあいいと言うのならオーナーの所で手続きしてきてください。オーナーは3階にいます。」

「まあご丁寧にありがとうございます」俺はオーナーのいる3階へと向かっていった。

――――目線：ペスカ――――――
なんか変な新人がのこのこと入ってきやがった。
そいつはなんだかわかんないけど一番腹がたつ奴だった。
俺はそいつに聞いてみたんだ。
「おい、お前ここをどこだと思っているんだ？」と。すると奴は、

「いや、普通にただのギルドだと思っているけど・・・」って答えだした。

なめてやがると俺は思ったんだ。そして気付いたらそいつを殴っていた。
全く、気に食わないがギルドに入るならしょうがない。
でもできるだけかかわらないようにしておこう。

――目線：広幸――――――
「ここがオーナーのいる部屋か」俺はドアを開けようとした。
ドアの取っ手を掴んだ瞬間、俺は思わず身震いをした。
中にものすごい奴がいる、それを肌で感じたんだ。
しかしもう後戻りはできない。俺はあいつに殴られてから思ったんだ。
「絶対にこのギルドに入って、あいつを超えてやる」と。
俺は勢いよくドアを開いた。
「すいません！ここのギルドに登録したいんですが」
椅子に座っていた男は立ち上がった。男はとても巨大な体で、もの凄い筋肉であった。
「なんだ？お前が魔術師ロウの言ってた男か？」巨大な男は言う。
「はい。私はロウ師匠に魔術を教えていただき、このギルドに入りたいと志願しました。」
こういう時はあんな野郎にでも敬意を表さなくては。
「よかろう。あいつの頼みごとだ。・・・それに何よりお前は面白そうな感じがする。」
「はい？」・・・この男、全く意味がわからん。
「お前、元からこの異世界にいたわけでは無いな」男は言った。
この男、どうやらただものでは無いらしい、と俺は感じた。

そして俺は正直に全てのことを話すことにした。

「なるほどな・・・お前は一度死んでおり、ロウによって異世界に転生されたわけだな。
そのような奴は他にも何人も見てきたぞ。まあどいつも死んでしまったがな」

「そんな恐ろしいことといわないでくださいよ！」俺は身を震わせ言った。
どうやら転生されてきた奴らは俺以外にもたくさんいるらしい。
しかし、異世界は前の世界にあったゲームのようには進まず、だいたいの奴は魔物に殺されてしまうそうだ。

「ははは、まあお前にはなにか特別なものを感じる。・・・よし！ギルド登録の許可をしよう！
これからお前はこのギルドの一員だ！この世の中の平和のためにクエストをこなしてくれ！」

「わかりました。でもこれだけは言わせてください。
俺は平和なんかのためにクエストはやりません。全ては金を稼ぐためだけです」俺は言う。
カッコよく言ってみたが、内容は金目当てのただのクズ人間だ。

「ハハハハハ！！こいつは面白い野郎だ！
あ、自己紹介がまだだったな。俺はギルド『ＰＵＮＩＳＨＭＥＮＴ』のオーナー、カーキ・フレアだ！
これからよろしく頼むぜ。早速だが、お前はこの街をあまり知らないようだ。
ちょっとギルドの一員に案内してもらうように頼んどくよ」とフレアは言った。

「わかりました。これからよろしくお願いします！」俺は頭を下げて言った。
これから俺の金稼ぎが始まるのだ、と思うと喜びを抑え切れなかった。
しかし、異世界生活はそんな簡単にいくものでもなかった。――――

――――目線：魔術師ロウ――――
「どうやら無事にギルドに登録できたようですね」私は広幸と電話していた。

「はい、ちょっと気に食わない奴がいましたけど・・・」彼は言う。
「やはりそうでしたか・・・まあこれから彼らと打ち解けていってくださいね。
あ、あとギルドでは単体行動もいいですが、パーティーを組んでおいた方がいいですよ」

「なるほど・・・まあ誰か気の合いそうな奴がいたら組みますよ。
それじゃあ」彼は電話をきった。

やはり、彼は面白い。面白いですよ。
こっそりフレアとの会話を聞いていましたが、
金目当てでクエストをやる、とオーナーに堂々と言える人がいるでしょうか？
彼にはどくとくの魅力がありますね、それが裏目にでないといいのですが・・・
「まあもう少し楽しませてもらいましょうか、広幸君」

――――目線・広幸――――

俺はちゃんとギルドに入会することができた。
そして俺は今、人生最大のチャンスを迎えている。
俺は剣士をやっているらしい女の人にこの街を案内してもらうのだ。
その女の子が尋常なないほどにかわいい。てか一目惚れしてしまった。

その女の子は青色の瞳をしていて、まさに異世界って感じだった。
髪の毛は茶色で長髪、身長は俺より少し低いくらいだ。
そして、顔は整っており、女優をやっていけるくらいの美形であった。
スタイルも抜群。くびれているお腹、足もけっこう長い、更に豊かな胸で、モデル体型であった。

これは尋常じゃない。写真を撮って見せてあげたいくらいだ。
まあこの世界にデジタルカメラなどという機械は無いのだろうが。

「あ、あの、そ、その、こ、今回は宜しくお願いしますぅぅぅ！」
ダメだ。ありえないほど緊張する。先程から手汗が半端じゃない。

「そんな緊張しなくてもいいんだよーこちらこそ宜しくね！」女の子は普通に話しかけてきた。

声もかわいい。もう全てがかわいい。
でも俺みたいなダメ人間が手をだしてはいけない存在なんだ、と俺は痛感した。

「よ、よろしく。俺の名前はヒロユキ。君の名前は？」俺は震えを

こらえ、なんとか話した。

「私の名前は、ハーブ！剣士をやっているの。でも私も3日前にギルドに入ったばっかりで・・・
あ、でもヒロユキよりは先輩だねっ」ハーブは今以上に近くに寄りそってきた。

もうダメだ！！俺の心臓が張り裂けそうぅぅぅぅう！！
俺は初めて恋というものを知った。

「じゃあざっくり街案内するよー」そう言いながらハーブは俺の手を握ってきた。

「ちょ、ちょ、ちょお！！！」俺は顔を真っ赤に染めた。

「こうしてると、恋人同士みたいでしょ？・・・ダメ・・・かな？」
ハーブは俺に上目遣いを使ってきた。これがもうたまりませぇぇぇん！！

「は、はやく、あ、案内、し、してくれよ」もうカタコトで何を言ってるのかわからない。

「はいはい、はじめにここが武器屋だよー！
ここでおおかたの武器は買うことができるからお金に余裕があったら買うといいよー！
ちなみに武器は強化することもできるの！詳しくは店長にきくといいよ。じゃあ次ね！」

俺はハーブに手を引っ張られ、道具屋、雑貨屋、宿屋などなどと、色々な場所に手を握られたまま案内された。

「きょ、今日は色々教えてくれてありがとな。じゃあ俺は宿屋に泊まりに行くわ」

「こちらこそ楽しかったよ！じゃあ明日ギルドでねー」ハーブはそう言って人ごみに消えていった。

「ハーブか・・・覚えておこう」俺は宿屋を目指した。

――――目線：ハーブ――――

今日は面白い少年に出会った。

私が悪戯でちょっと手を握ってみたら頬を真っ赤に染めてた。

なんだろう、すごくかわいかった。私、ちょっとあの人のこと好きなのかも・・・

まあ、ちょっと案内しただけだし気のせいよね。

明日一緒にクエストに行ってみようかな。ちょっと気になるし。

「あー明日が楽しみだなー」そうつぶやきき、私は家の中へと入っていった。

――――目線：広幸――――

「すいません。ちょっと今月、この宿に泊まりたいんですけど」俺は宿屋の人に言った。

え？なぜ、1ヶ月単位で泊まるかって？そりゃこっちのほうが安く

すむからだよ。
こういうのって、一日で泊まるのより、一ヶ月で泊まったほうが少しだけ一日あたりの値段が下がるんだよね。俺はちょっとした節約をした。

「わかりました。では３００００メイル頂戴致します。」

げっ！！高いな！・・でも一日なら１５００メイル、つまり一ヶ月ではだいたい４５０００メイルってところだな。これなら１５０００メイルの得だ。これくらいは我慢しよう。

「はい、どうぞ」俺は３００００メイルを差し出した。

「確かにいただきました。ではこちらが部屋の鍵です。
鍵をなくした際は、追加で５０００メイル支払っていただきますのでご了承お願いします。」

「はいはい」俺はそう言って鍵を受け取り、自分の部屋へと向かっていった。

「ここが俺の部屋か」
部屋はけっこう広かった。２ＬＤＫで、寝室にはベッドがあらかじめついている。
３００００メイルでこの部屋はなかなかのものだろう。

「明日から俺の異世界生活が始まるんだな」俺はベッドに横たわり目を閉じた。

明日から俺の金稼ぎが始まる。そう思うと、俺はうきうきしてしょうがなかった。――――

◆◇◆◇◆◇◆◇◆

残高：３３０００メイル

収入：０メイル

支出：３００００メイル

―――――――――――――――

合計：３０００メイル

◆◇◆◇◆◇◆◇◆

俺、ギルドに登録する（３０００メイル）（後書き）

感想・評価お待ちしています！
主人公の魔法、キャラクターなどのアイデアも募集しているので
何かあったら是非お願いします！

採取クエスト『薬草納品』（４５００メイル）（前書き）

今回は広幸の初仕事です。
ちょっと適当になってしまいましたが勘弁してくださいｗｗ

採取クエスト『薬草納品』（４５００メイル）

――目線：広幸――

気持ちのいい朝、昔の世界とは変わらずに俺はカーテンを開いた。少なくとも、こんな気持ちの悪い生き物が空を飛んでいなければの話だが。

「グェェェェ！」たくさんのドラゴンが飛び交っている。

「やっぱりここは異世界なんだよな」俺はドラゴンを見てここが異世界なことを思い出す。

そう、この世界はＲＰＧゲームでしか想像もできないような『魔物』が生息する世界なのだ。

俺はギルドへと向かった。今日が俺の初仕事なのだ。

そして俺はギルドへと到着すると、ボードを見始めた。

「まずは簡単そうなクエストからだな。」俺は採取クエストを探し始めた。

そう、採取クエストは比較的初心者向けのクエストである。

戦闘を避ける事だって可能なわけだ。俺の雑魚魔法では勝てる気がしないので俺はこの採取クエストを選んだ。

「ほうほう、『薬草納品』か・・・割と簡単な仕事だな。

内容は？・・・薬草１０ｇで３００メイル支払います、か。よしこのクエストにしよっ」

俺は薬草を採取するクエストを引き受けた。するとそこに聞き覚えのある声の女がやってきた。

「ヒロユキー！一緒にクエスト行こー！」
そう、そいつはハーブだった。やばいやばいやばい周りの男達がじーっと見ている。
どうやら嫉妬されているようだった。早く俺はこの場から逃げ出したい。

「お、おい、周りが見てるんだけど・・」俺はハーブにささやいた。

「じゃあ早くクエストに行こうよー！そうじゃなきゃ・・・・泣いちゃうよ？」
ハーブは目をうるうるさせて言った。

「ぐっ！？・・わかったわかったから！！泣くな！」俺は必死に言った。
・・・ハーブめ、随分と卑怯な手を使いやがって・・・
もしこんなところで泣かれては、俺がいかにも悪役と勘違いされてしまう。
もちろんハーブのことが好きな奴らは俺に襲い掛かるであろう。

「やったー！ヒロユキとデートだぁ！」ハーブは大声で言った。
その瞬間、俺は周りから殺気を感じた。どうやら誤解されたらしい。
でも今は誤解を解いている場合ではない。
俺はハーブを手を掴んでギルドから急いで飛び出した。

「・・・お前のせいで大変な目にあったじゃないか」俺はハーブに言った。

「まあまあ気にしなくていいんじゃないかなー？」

「気にするよ！またギルドに戻ったら大変な目に遭いそうで怖いよ！」俺は言った。

「それよりヒロユキ、なんのクエストに行くの？」ハーブは聞いてくる。

「そうだな、まずは安全なこの薬草採取のクエストに行こうと思う」

「よーし、それじゃあ出発ー！！」

「ちょ、ちょ、ちょまてぇぇぇぇいいい！」ハーブは俺の腕を掴んで強引に引っ張っていった。

「ここが今回の場所（フィールド）か・・・」俺とハーブは広い森へと来ていた。

この世界には色々は場所（フィールド）がある。

火山・氷山・洞窟・地下などなど様々な場所があり、

その場所に応じてでてくる魔物、強さ、クエストの難易度がかわってくるのだ。

今回俺達は一番簡単な場所の、『森林』へと来ている。

俺は早速、図鑑を開いて出現する魔物を調べた。

どうやら出現する魔物は、

・ブルースライム

初期の雑魚モンスター。体で体当たりをして攻撃するが、ダメージはほぼ０だ。

産物：『青魔石』３００メイル～３０００メイル

・ゴブリン
初期の雑魚モンスター。手に持っている何かの動物の骨で攻撃してくる。
ブルースライムよりは強烈だが、決して強くは無い。
産物：『ゴブリンの毛皮』５００メイル～３００メイル

この２体ぐらいらしい。これなら俺の雑魚魔術でも撃退できるかもしれない。
まあ薬草目当てだから戦闘はなるべく避けるけどね。

「じゃあ私はどうすればいいー？」

「そうだな、とりあえず薬草を採取しまくってきてくれ。
俺はちょっといいことを考えたんだ。」俺はハーブに指示した。

「わかったよ！たくさんとってくるからねー」ハーブは走り出していった。

「さてと・・・俺もとりかかるか」俺はニヤリと笑ってハーブと反対方向へ向かっていった。

――――目線：ハーブ――――
私は今、ヒロユキとクエストにきているんだ。
クエストはかなり地味なやつだけど、ヒロユキと一緒ならなんでもいいや！
薬草もだいぶ集まってきたし、ちょっと魔物でも倒してみようかな。

「あ、あんなところにゴブリン発見ー！」私は腰につけていた剣を抜いて接近する。

ゴブリンはまだこっちに気付いていないようだよ。
「チャンスー！」私は剣をゴブリンに振りかざした。
「ゴブゴブゴゴブ！！」剣はゴブリンに突き刺さった。
どうやらゴブリンはお怒りの様子なんだよ。
ゴブリンが襲い掛かってきた。私はもう一度剣を振りかざす。
「ゴブブ・・・」ゴブリンは瀕死になったんだよ。
「とどめだー！」私はゴブリンの心臓に剣を突き刺した。
「やったー！初めて一人で倒せたよ！」私は初めて魔物を倒したことに感動を覚えた。
しかし、そんな私も感動も一瞬で壊れてしまった。
「ゴブブゴブブ・・・」周りからゾロゾロとゴブリン達が現れる。
一瞬で私はゴブリンに囲まれてしまったの！
「きゃあぁぁぁぁ！！！」

――――目線：広幸――――
「きゃあぁぁぁぁ！！！」俺はハーブの悲鳴を聞いた。
「美少女がピンチなら、助けに行くフラグが強制的に立っちまうんだ！」俺は痛感した。
ハーブになにかなければいいんだが・・・
俺はハーブのいる場所にたどり着いた。どうやらゴブリンに囲まれ

ているらしい。

「ハーブ！助けに来たぞ！」

「ヒロユキ！ありがとう！こいつらなんてぶっ飛ばしちゃって！！」その言葉は俺の心に突き刺さる。

「・・・ごめん、俺の魔術、殺傷能力ないんだよね・・・こいつらなんて殺せないよ・・・」

「え・・・」俺とハーブの間に沈黙が生まれる。

「ゴブブゴゴブ！」どうやらゴブリン達は俺に気付いたらしく、襲い掛かってきた。

「・・・ったく、やるしかないよな！ハーブ！ちょっと協力してくれ！」

「わかったわ！・・・何をすればいいの？」ハーブはゴブリン達を押しのけ、俺の方へやってきた。

「そうだな・・・周りの木を切り倒してくれ！」俺はゴブリン達の気をひきつけながら言った。

そして、俺の作戦が始まった。

「ある程度は切り落としたよ！」ハーブは息を切らして言った。
さすがに４本もの木を切り倒すのはきついであろう。
ハーブは俺の理想通りに切り倒した木で四角形をつくってくれた。

「よし。ありがとう。じゃあちょっと離れておくんだ。」
俺もゴブリン達から逃げつつも色々と準備を終えていた。
俺はゴブリンをひきつけながら木でできた四角形の中におびき寄せた。
「今だ！炎の精霊よ、我の体にその力を示せ！ファイアボール！」
俺の手からチャーハンが炊けないほどの炎の球が発射された。
それと同時に、俺は木でできた四角形から外側に出る。
その球はゴブリンに当たるのではなく、木へと直撃して引火した。
「ゴブゴゴブ？」あっという間に火は木から木へと移り、
ゴブリンの逃げ場を完全に塞いだ。
「これでなんとかなったな。とりあえず薬草集めて帰るか」俺は言った。

俺らは薬草を集め終わり、ギルドへと戻ってきた。
「これが今回の依頼の納品物です。」俺はフレアに薬草を渡した。
「おお、これは大量だな。ふむふむ・・・１００gというところか。
よし、報酬だ！ありがたく受け取れ！」俺は薬草と交換で報酬金をもらった。

１００ｇということで３０００メイル、
ハーブと山分けするので１５００メイルだな。なかなかの稼ぎだ。
「じゃあ帰りますね。」俺らはギルドを後にしようとした。
その時、「あんなにたくさんの薬草どこで取ってきたのー？」とハーブが聞いてきた。
「おい、俺は金稼ぎのためならなんでもするんだぜ？
薬草に似ている葉っぱを適当に入れといたからあんなに稼げたんだよ。」
「・・・最悪」ハーブに軽蔑的な目で見られてしまった。
そして俺はギルドを出る。その瞬間に俺は周りから殺気を感じた。
「おい、お前、どうなるかわかってんだよな？」
それは、男達だった。そうか、誤解はまだ解けていなかったんだ。
「なんでこうなるんだぁぁぁあああ！」

―――目線；ハーブ――――
ヒロユキはただのダメ人間だった。
薬草のかわりに変な草いれるし、まともな魔術は使えないし・・・
でも、助けにきてくれたヒロユキすっごくかっこよかったんだよ！
また今度も一緒にクエスト行けるといいな。

どうやら私、本当にヒロユキのこと好きになっちゃったみたい・・・

◆◇◆◇◆◇◆◇◆

残高：３０００メイル

収入：１５００メイル

支出：０メイル

―――――――――――――――

合計：４５００メイル

◆◇◆◇◆◇◆◇◆

採取クエスト『薬草納品』（４５００メイル）（後書き）

今度は討伐クエストを書いてみたいと思います。
その前にハーブの邪魔をする美少女キャラもだしてみたいけど・・・
感想・評価・お気に入り登録お待ちしています！

討伐クエスト『ブルースライムの宴』～前編～（前書き）

今回は2話にわけてみます。
一話一話は短いですが、内容を濃くしようと思います

討伐クエスト『ブルースライムの宴』～前編～

――――目線：広幸――――

俺の荒稼ぎ生活2日目。まだ異世界には慣れていない。
俺は質素な食事（１００メイル程度のやつ）を食べてギルドへと向かった。

「なんかいいクエストないかな？」俺はギルドにつくなり、ボードを見始める。
その時、魔術師から電話がかかってきた。

「はい、もしもし」

「もしもし、私です。異世界生活は楽しんでいますか？」

「なかんか稼ぎやすくて楽しいです。魔術が強ければもっといいんですけど・・」

「まあまあそれはしょうがないです。そこであなたの参考程度になればいいと思って電話しました。
まず、金を稼ぐために簡単なクエストをたくさんやるのもいいですけど、
討伐クエストをやってみてください。
採取クエストよりは難易度は高いですけど、報酬が高めです。
そして、産物を獲得すると、それを売ってボーナス報酬もゲットできますし、
魔物を倒すことで、経験値的なのが溜まって魔力が上がります。
つまり、強力な魔術を発動することもできるようになります。どう

ですか？」

「なるほど。確かに俺にとっての利益は大きいですよね。じゃあそうします。では」俺はアドバイスをもらって電話を切った。

「じゃあこれで行くか」俺が選んだのはこのクエスト

『ブルースライムの宴』
・基本報酬　一体につき、５００メイル
・産物『青魔石』　一個につき、５００メイル

だそうです。

俺はクエストを受注し、ギルドをあとにした。

途中、雑貨屋に寄って『イグリュスの羽』（５００メイル×５）を買う。

〜図鑑データ〜
イグリュスの羽。森林に生息するイグリュスの翼から入手した羽。非常に油を含んでおり、ある程度の衝撃を与えると着火する。

俺は羽に衝撃を与えないようにして森林へと向かった。

森林に着いた。それと同時に俺は森のなかへと入っていく。

「ここはいい場所だな。」俺は森の中の広いスペースを見つけ出した。

え？何をしているかって？簡単じゃないか。俺が普通に戦うとでも

思ってるか？
罠を仕掛けてスライム達を一網打尽にしてがっぽり稼ぐのだよ。
俺は早速は周りの草を大量に引き抜いた。
「草はＯＫ。水の精霊よ、我の体にその力を示せ！ウォータードリル！」
俺の手から水洗トイレ並の回転力の水流ができあがる。
それで地面を削り、そこそこのサイズの穴を掘る。
そしてそこに、先程引っこ抜いた草と、イグリュスの羽を入れる。
この罠を1時間程かけて５つ作り上げた。
「さてと、罠は完成だ。それじゃあ奴らを集めに行くか。」俺は森の奥へと入っていった。
早速何体かのスライムを見つけた。
「ひゃっほう！」俺はスライムに飛び蹴りを入れた。
当然ダメ人間な俺の蹴りの威力はほぼ０だ。スライム様はどうやらお怒りの様子。
「グガガギガ！！」その奇妙な鳴き声と共に、周りから大量のスライムが集まりだす。
ざっと３０体は超えたであろう。俺はその数に恐怖と歓喜の入り混じった複雑な感情を覚えた。
「やーいやーいバカ共が！こっちまで来いよ！」俺は挑発しながら逃走した。

スライムたちは俺を追いかけてきている。このまま罠のところまで逃げ切れば俺の勝ちだ。

俺は気付けば小６並の足の速さから、中１並までと進化をとげていた。

・・・といってもポッチャリ系の中１と変わらないが。

俺は遅いながらも必死に罠のほうへと走る。

そして、なんとか罠のところまでたどり着くことができた。

「百方！俺の勝ちだぜえええええ！！」スライムたちは俺の後ろを追ってくる。

そして次々と罠に引っかかり始めた。

罠の場所に乗っかると同時に、羽が衝撃によって着火し、草へと引火する。そして、見事スライムの丸焼けの完成というわけだ。

あっという間に俺を追ってきたスライム達計３０体は丸焼けになった。

表面が焦げてボロボロになってるが、産物を取るために切り開くと、中は生温かくてドロドロしている感じがたまらなく気持ち悪い。

とりあえず俺は、『青魔石』を１０個ほど手に入れた。

そして、森林をあとにしようとした。

その時、空から巨大な魔物が現れる。

褐色の翼を持ち、尻尾が長く、くちばしのついている鳥と龍の混ざったような魔物だ。

しかし、俺はその翼に見覚えがあった。

そう、この魔物は、本物のイグリュスだった。

討伐クエスト『ブルースライムの宴』～前編～（後書き）

続きは明日のお楽しみ～ｗｗ

感想・評価・お気に入り登録お待ちしています！

討伐クエスト『ブルースライムの宴』～後編～（３４４００メイル）（前書き）

今回で初めての討伐クエストの話は終わりです。
今回はあのキャラが・・・？？って感じです。

討伐クエスト『ブルースライムの宴』～後編～（３４４００メイル）

俺がブルースライム討伐を終え、産物を取り出した後、ギルドに帰ろうとしたときに、
あの褐色の羽を持つ龍の魔物『イグリュス』が現れる。
俺は果たして逃げられるのか！？――――

「グェェェェェ！！」イグリュスは色々となぞめいた奇声を発した。
スライムよりも気持ちの悪い声は、俺をイラっとさせた。

「ったく、今はお前とやりやってられねぇんだよ」俺は青魔石を抱えながら逃走する。

すると、後ろからイグリュスが攻撃してくるのを見た。

「グェェェェェ！！」イグリュスは翼を大きく広げる。
すると、勢いよく回転し始め、羽を飛ばしてきた。
羽は途中で炎をまとい始めた。

あいつの羽は非常に油を含んでいる。そして空気抵抗により炎がついたのだ。

炎をまとった羽は俺に直撃する。

「うぉ！！熱っ！！」俺は羽に当たったが、致命傷は避けられた。
しかし、炎は周りの草木へと移る。早く逃げないと逃げ場がなくなってしまう。

俺は青魔石だけは捨てずに、なんとか逃げようとした。

しかし、イグリュスは俺をしつこく追ってくる。
「グェェェェェェェェェェェェ！！」再びイグリュスは回転を始めた。
回転の勢いは先程よりも増しており、かなりの羽を飛ばしてくるであろうと俺は考えた。
「これがラストチャンスだな」俺は燃えてない場所へと必死に走る。
しかし、あと一歩遅かった。
横で燃えている木が倒れ、俺の逃げ場所を完全に塞いだ。
「くっ！！万事休すか！」俺は奴の大量の羽の猛攻をあびて力尽きるのかと考えると、
足の震えが止まらなくなってしまった。
「グェェェェェェェ！！」先程の3倍近くの量の奴の羽が俺めがけて飛んでくる。
俺は思った。ここで異世界ライフも幕を閉じるんだな、と。
しかし、俺の考えは単なる妄想にすぎなかった。
「おい、新入り！なにしてんだ！早く逃げろ！」ずぶとい声が聞こえ、
俺めがけて飛んできた羽が全て凍りついた。
そして俺の目の前には大きな剣をかついだ、見覚えのある男が立っていた。
それは最初に俺がギルドに訪れたときに俺を殴ってきた奴、ペスカであった。

「お、お前は！？」

「うるせぇ！早く逃げろっていってんだよ！」ペスカは怒鳴った。

「あ、ありがとう。」俺は青魔石を抱え逃走した。

――――目線：ペスカ――――

「やっといなくなったか」俺は剣をイグリュスへと構えた。

「グェェェェェ！」イグリュスは随分と怒っている。

翼を大きく広げ、勢いよくダイブしてきた。

「ったくよ・・・面倒だな」俺は剣を襲い掛かってくる奴の顔面にぶつけた。

「グギャアアア！！」イグリュスは痛みに絶叫した。

あいつの顔は凍り始めた。え？なぜそんなことができると？

俺の一番得意な魔術なんだが、『アイスブレイク』という魔術がある。

この魔術は簡単に言えば、自分の体から絶対零度に近い温度の冷気を出して、

その冷気を武器にまとわりつかせて攻撃しているんだ。

だから武器に触れた瞬間にだいたいのものは凍りつく。

「グェェェェェエ！」俺が説明をしているうちに奴は自分の翼を燃やし始めて

氷を溶かしているようだ。

ちなみにイグリュスは翼全体を燃やし始めると、もうかなり弱っている証拠だ。

それと同時にあいつも覚悟を決め、今まで以上に猛攻をしてくる。
「ギャアアアア！！」イグリュスは空へと大きく舞い上がった。
その姿は、不死鳥を連想させる。まあ死にかけだから不死鳥というよりは瀕死鳥だけど。

「グギャアア！！」奴は俺のボケをスルーし、上空から一気に俺の方へ下降してきた。

「とどめだ！」俺は剣を飛んでくるあいつへと大きく振りかざす。剣が頭へとモロにＨＩＴする。そして、イグリュスは動かなくなった。

「よし、帰るか」俺は、イグリュスを担ぎ上げて、ギルドへと向かっていった。

――――目線：広幸――――

まさかあいつに助けられるとは思ってもいなかった。

あいつは本当はいい奴なのだろうか・・・俺は疑問に思う。
「とりあえず後でお礼は言わないとな」俺は報酬金を受け取り、あいつの帰りをまった。

ちなみに今回の報酬は、
基本報酬：１５０００メイル
産物報酬：５０００メイル
だ。かなり上出来であろう。

「おう、帰ったぞ」そしてあいつは帰ってきた。イグリュスを担い

で。

「おお！これは大きいイグリュスだな！」周りの奴らがペスカにたかる。

そいつらを蹴散らしながらペスカは報酬金をもらいにきた。

ざっと見たところ、１万メイルくらいはあった。猛烈に金がほしくなった。

しかし、俺はそんな恥ずかしい感情を押さえ込み、お礼をした。

「さっきはありがとな。」

「気にするな。あいつは俺の獲物だった。そこにお前がいて邪魔くさかっただけだ。」

やはりこいつは一言一言ムカつくやつだ。しかしここは大人になろう。

「ああ、お前のおかげで助かったよ。本当にありがとう。」

「べ、べ、べ、べつに気にするなと言ってるだろ！」少しペスカの顔が赤くなっている。

「こ、これは、お、お前の入団祝いの、プ、プレゼントだ！」

そう言ってペスカは１万メイルを差し出してきた。俺はものすごく興奮した。

「本当にくれるのか？」

「ああ。お、俺の目的はイグリュスの素材だしな。」・・・嘘が下

手なやつめ。

「ありがとう！今度は一緒にクエストいこうな！」

「あ、あの、俺、俺はお前のこと気に入ったわけじゃ・・・」

俺は最後までペスカが喋り終える前にギルドを後にした。

「あいつ・・・結構いい奴じゃないか」俺はちょっと嬉しかった。

――――目線：ペスカ――――

やっぱりあいつは色々とおかしい。

人の話は最後まで聞けよっつーの。

でも、俺は少しあいつのことが気に入った。

ん？なぜかって？それはだな・・・あいつには何か他の奴には無いものを感じる。

あの戦い方、普通の奴ならまず考え付かないだろう。

でもあいつはそんなせこい手を使ってスライムを一網打尽にしていた。

あいつはもの凄く頭のキレる奴だ、と俺は考えたんだ。

今度一緒にクエストいって観察してみるのも面白いかもな・・・

◆◇◆◇◆◇◆◇◆

残高：４５００メイル

収入：３００００メイル

支出：１００メイル

――――――――――――――――

合計：３４４００メイル

◆◇◆◇◆◇◆◇◆

討伐クエスト『ブルースライムの宴』～後編～（３４４００メイル）（後書き）

どうでしたか？
感想・評価がもらえたりするとかなり嬉しいです。
めっちゃ小説頑張りたくなります。
できれば感想・評価・お気に入り登録してもらいたいです。
てかしてくださいｗｗお願いします！！

討伐クエスト『ゴブリン撲滅運動』～前編～（前書き）

今回も討伐クエストを入れてみました。
そろそろハーブもだしたほうがいいのかな・・・

討伐クエスト『ゴブリン撲滅運動』～前編～

――――目線：広幸――――

荒稼ぎ生活３日目。俺は、かなり昨日頑張って稼ぎまくったため、今日のご飯は奮発することにした。もしかしたら人生初の贅沢なのかもしれない。

本日のメニューは魔物の肉、かなり栄養価の高い野菜、炭酸ジュースという豪華な物だ。

ちなみに今日のご飯には３０００メイルを注いだ。これだけあったら一ヶ月は持つ食費なのに。

「びゃあ〝ぁ〝〝ぁうまひぃ〝いぃ〝」

俺はあまりにも興奮してしまい、マ●オさん的なものになってしまった。

さあ、俺はひと時の幸せを味わった後、また今日も荒稼ぎへと行くのだ。

「さてと・・・なんかいいクエストないかな・・・」

俺は討伐クエストの中でも簡単そうなのを選ぶ。いつか魔力が格段を上がり、チートキャラになることを信じて。

この頃ハーブには会わない。一体どこで何をしているのだろうか。

少しだけ、いやかなり気になります。尋常じゃないです。

「お、このクエストならちょっと難易度も上がっていいかもしれないな」

俺がそう言って受注したクエストは、『ゴブリン撲滅運動』だ。

～クエスト説明～

最近、森林に大量のゴブリン達が現れて、森の木を無差別になぎ倒しているようだ。

このままではせっかくの森林の大切な樹木がなくなってしまうかもしれない。

だからできるだけ多くのゴブリンを倒してくれ。報酬は多く支払う。

・基本報酬　ゴブリン一体×１０００メイル

・産物報酬　ゴブリンの毛皮一枚×８００メイル

・物品報酬　薬草×１０個

あ、ちなみに物品報酬というのは、クエストを完了した後に依頼主からもらえる物品のことで、

アイテム、素材、装備品、魔術書（魔術を習得するのに必要な本）などなどがもらえる。

「よし、そうと決まれば罠の準備だ」俺はギルドを後にし、雑貨屋へと向かっていく。

言うまでもないが、魔術が強くならない限り俺はせこい手しか使うつもりはない。

しかし、今回のクエストはちょっと厄介な点がある。

ブルースライムの産物は内臓にあるためボコボコにしても構わないが、

このゴブリンの産物は毛皮だ。そう簡単に傷つけると引き取ってもらえないだろう。

「今回は・・・とりあえずピアノ線が欲しいところだな。」

俺は雑貨屋でピアノ線（５０ｍにつき７００メイル）と、
電熱線（５０ｍにつき７００メイル）をそれぞれ５０ｍ買う。これで準備は整った。

「早速出発だ！」俺は張り切って森林へと向かった。

森林は確かに以前よりも木が減っていた。環境破壊はよくない、と俺は思った。

早速森林の奥へと足を踏み入れると同時に、電熱線を手袋の上から右手に巻きつけ始めた。

あ、ちなみにこの手袋は、この前一緒にハーブとクエストにいった時に、
プレゼントとしてもらった。どうやらお揃いらしい。
まあそんな余談はおいといて、俺は二重に履いた手袋の上に電熱線を巻きつけておいた。

そしてそれが完了すると、ピアノ線を2本の高い木の一番高いところの間に４５ｍ程、蜘蛛の巣のように巻きつける。その木はもうかなりボロボロで、簡単に折れるが重量感があるるという性質があった。
そしてピアノ線の残りの５ｍくらいを他の一本の木に巻きつける。
その木の根元を掘り起こしておいて、少し蹴る程度で倒れるようにしておいた。
これで全自動カッター機の完成というわけだ。

ゴブリン達が俺を追ってきてその蜘蛛の巣トラップの場所へとやってくる。

その瞬間、俺は木を思いっきり蹴る。
蹴られた木は倒れ、その木の重みで2本の木は衝撃に耐えられず折れる、はずだ。
すると、奴らの頭上に折れた木とそこに巻きつけられていたピアノ線が落下してくる。
重量感満載な木のおかげで、落下スピードはとても速くなり、一瞬で奴らの頭をぐちょぐちょに・・・おっとこれ以上は想像にお任せしよう。

そんな恐怖の拷問器具のような罠が今完成した。
誤って自分がその罠に引っかかると間違いなく、即死→異世界生活終了であろう。

俺は絶対にミスをしないと誓い、ゴブリン達をおびき寄せにさらに深部へと向かった。

どうやらゴブリン達は集落を形成して生活しているらしい。
だったらゴブリン達をかなりお怒りにさせる手段は一つ・・・

「炎の精霊よ、我の体にその力を示せ！ファイアボール！」
俺がそう言い放ったと同時に、左手に炎の球が形成される。
その球を、俺は一番大きな家へと飛ばした。

そう、今俺がしていることは放火だ。
住み心地よい住まいが無くなってしまうどんな動物でも悲しいであろう。
その原因を作ったのが俺なのだから、絶対に俺を殺そうと追ってくるはずだ。

俺はそれを狙っていた。そして、ぞくぞくとゴブリン達が家から急

いでてくる。
俺は魔術を使い、放火を続けた。どうやらゴブリン達は俺が放火していることに気付いたらしい。

「ゴブゴブブ！！」ゴブリン達は一斉に俺の方へと走ってきた。
ざっと２０体くらいであろうか。なかなか上出来じゃないか。

俺は罠の方へと走り出した。ゴブリン達はなかなかに足が速い。
じわりじわりと、俺とゴブリンの距離は近くなっていった。

「うおおおおお！」俺はなんとか罠のところまで逃げ切った。
走ってきた勢いを利用しつつ、罠を始動させるための木を蹴った。

木に俺の脚が当たったと同時に、木はゆっくりと倒れ始めた。
そして、その木の重みで、２本の木が折れる。そして蜘蛛の巣のようになったピアノ線が落ちてくる。

「ゴブ？」ゴブリン達は上を見上げた。そして罠に気付いたらしく、逃げようとしている。

しかし、ちょっと気付くのが遅かった。
ゴブリンの頭上にピアノ線が落ち、ゴブリンの大半はピアノ線により体を切り裂かれ、
口では表現できないようになってしまった。（自主規制により、リアルには表現いたしません）

しかし、３体程のゴブリンは罠を回避したらしく、ピンピンしている。

「やれやれ・・・もう一つの罠を使うことになるとは・・・できれば今の罠で即死してもらいたかったんだが」俺は生き残ってしまったゴブリンに同情した。

しかし、俺だってこの異世界で生き抜くためならどんな手段も選ばない。

「いくぜぇぇぇぇぇぇ！！」

討伐クエスト『ゴブリン撲滅運動』～前編～（後書き）

今回は主人公の作る罠を考えるのが大変でした。
感想・評価お待ちしています！
あと、主人公の仕掛ける罠でいい案があったらアドバイスください！

討伐クエスト『ゴブリン撲滅運動』～後編～（８万４０００メイル）（前書き）

今回は後半戦です。
罠は多少適当な気もしますがご勘弁を・・・

討伐クエスト『ゴブリン撲滅運動』～後編～（８万４０００メイル）

「いくぜぇぇぇぇぇぇ！！」俺はゴブリンの方へと走り出した。

「ゴブブ！」ゴブリンは手に持っている尖った骨で殴りかかってきた。

「危ねぇ！」俺は骨が体に当たるギリギリで回避した。
そしてそのまま他のゴブリンも華麗に避け、先程の罠のところへ行く。

「これなら使えるな」俺は罠に引っかかり、表現できないほどグロテスクなものへと豹変してしまったゴブリンの持っていた骨を頂戴する。その骨も先が鋭利になっており、皮膚に傷をつけることはできそうだ。
俺はゴブリンから逃げながら、その骨に、電熱線を巻きつける。
そして、俺の手と骨は電熱線を通してつながっている状態へとなった。これで準備完了だ。

「ゴブゴゴブ！！」ゴブリンは一斉に飛び掛ってきた。

「うおおおおお！」俺は尖った骨を一体のゴブリンの胸部に突き刺す。

「ゴブ！！」ゴブリンは痛みに苦しんでいる様子。その間に俺はゴブリン達を囲むように周りをグルグルと回り始める。

え？何をしているかって？・・・今俺は、ゴブリンに電熱線を巻きつけているんだよ。

そして、今からじわりじわりとこいつらを苦しめていくんだよ。
電熱線を巻きつけられたゴブリン達は身動きが取れなくなった。そこで俺は魔術を発動する。

「雷の精霊よ、我の体にその力を示せ！イナズマアロー！」

俺の右腕に雷がまとい始める。ちなみに魔力が上がって、今では乾電池３本分まで進化した。
その雷は矢を形成するのではなく、電熱線へと流れていった。
電熱線は電気が通ると、熱を帯びる。いくら乾電池３つ分でもそこそこの温度にはなるであろう。
しかし、電熱線を巻きつけている俺の手もやけどしてしまう。
そこで俺はハーブから貰った手袋を二重にして装着したのだ。これならやけどは避けられる。

手袋をしていても、電熱線が熱くなっていくのをを感じた。
それと同時に、「ゴブブゴ！！」というゴブリン達の悲鳴が聞こえ出す。
手袋をしてても熱が伝わってくるんだ。奴らは相当熱いであろう。

ちなみに俺が電熱線を選んだのには理由がある。
それは、ゴブリンの毛皮をあまり痛めたくないからだ。
第一の罠では体が引き裂かれるだけで、毛皮としての価値を十分に残すことができる。
そして電熱線は、炎の魔術と違って毛皮を焦がしてしまう可能性はかなり少ない。
多少傷はつくかもしれないが、価値はそこまで下がらないで済むだろう。

そうこうしているうちに、ゴブリン達は気絶してしまった。これでクエスト終了だ。

俺が今回倒したゴブリンの数は３０体。
今回は綺麗に倒せたということで、全ゴブリンから産物である毛皮を剥ぎ取れた。
そして俺は産物を抱え、ギルドへと帰っていった。

「これが今回の報酬です。」そう言われ、俺が渡された茶封筒の中には、

基本報酬　ゴブリン×３０体＝３万メイル
産物報酬　ゴブリンの毛皮×３０枚＝２万４０００メイル

計　５万４０００メイルが入っていた。かなりの高額であろう。
さらにそれと別に家に物品報酬である薬草が届くらしい。

俺は報酬額を見て飛び跳ねていると、ハーブが現れた。

「あぁ！ヒヨユキ～何そんなに喜んでるのー？」

「おお、さっきゴブリンのクエストに行ってきててね。
それで今回の報酬があまりにも高かったもんで喜んでいたのさ。」
俺はお金を見せた。

「わぁー！すごいお金だぁ！・・・こうなったら明日はデートに行こうね」
でたぞ・・・ハーブの人を困らせる発言。このせいで俺は殺されか

けたのである。
そして今も周りから冷たい視線を浴びる。めちゃめちゃ背中が痛い。
「・・・・」俺は無言であった。そこにハーブの追い討ちが来る。
「・・・ダメ？」ハーブは必殺技の上目遣いを繰り出してきた。これには俺も逆らえない。
「わかったよ！いけばいいんだろ！いけば！」俺はもうやけくそになっていた。
「やったぁ！じゃあ明日１０時にギルド前集合ね！」そう言ってハーブはでてってしまった。
「はぁ・・・俺の給料がぁ・・・」俺は自分の発言に後悔した。そこに殺気が近づいてくるのを感じた。
「おい、ちょっといいか・・・？」それは、ギルド中の男達であった。
また俺はこの男達に恨まれて、精神も肉体もボロボロにされてしまうのか・・・
「い、いやだぁぁぁぁぁぁ！！」ギルド中に俺の悲鳴が響いた。

――――目線：ハーブ――――
今日は久しぶりにヒロユキとあった。
最近はクエストが忙しくてずっと会えなくて寂しかったんだよ。

だから明日は精一杯楽しみたいな！クエスト以外での初デートだもん！

・・・って私、まだヒロユキと付き合ってないのに・・・

明日には思いを伝えられるとといいな！ってか明日、絶対に思いを伝えるんだから！

――――目線：魔術師ロウ――――

どうやらヒロユキ君の事を好きになってくれた人ができたようですね。

彼はこの世界にきて新しい人生を歩み、生きることの素晴らしさを感じてくれたでしょうか？

感じてくれると私も転生した甲斐があります。

まあ、まだまだ異世界生活も始まったばかり。これからも頑張ってもらいますよ。

明日のデートの様子、楽しみにさせてもらいますね。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆

残高：３万４４００メイル

収入：５万４０００メイル

支出：　４４００メイル

――――――――――――――――

合計：８万４０００メイル

◆◇◆◇◆◇◆◇◆

討伐クエスト『ゴブリン撲滅運動』～後編～（８万４０００メイル）（後書き）

次はデートの話です。
なにかリクエストあったら気軽に言ってください！

幕間　転生前の世界での出来事【出勤】（前書き）

幕間のものにしようと思ったので
こっち側にもってきました！
本編とは関係ないですが、見ていただけるとありがたいです。

幕間　転生前の世界での出来事【出勤】

俺の初出勤。俺は過去ずっとＡＬＬ１なダメ人間で、社会に受け入れられるとは思っていなかった。
そんな俺にもとうとう仕事が決まったのだ！――――――

「行ってきまーす」俺は朝食を食べずに、いや、正確には食べるものが無かったので食べずに
家をでた。もちろん一人暮らしだから当然さっきの「行ってきまーす」の返事は返ってこない。
俺は勉強面だけでなく、運動面、人間性その他もろもろがありえないほど残念なのだ。
当然彼女もいるわけなく、さびしい生活を送っている。

「よーし、会社で新しい出会いをするぞー！」俺は無駄な妄想をしながら会社へと向かった。

この時、俺は会社が超ハードブラックなことを知ることも無かった。

「ここが例の会社だな。よし、きちっと挨拶をせねば」俺は服装をビチっと決め、
会社の中へと堂々と入っていった。

「今日からここで働かせていただくことになりました！斉藤広幸です！
一生懸命働きますのでこれから宜しくお願いします！」
入るなり頭を深く下げる。これで掴みはバッチリなはずだ。
・・・あれ？何も反応ないぞ？

俺はそう思いながらゆっくりと頭を上げた。
するとそこには、俺以外にふとった社長らしき人間と、従業員1人しかいなかった。
「ノオオオオウ！！」俺は今まで描いていた妄想をぶち壊されたため、発狂した。
「ああ、君が新人ね。早速仕事にとりかかってもらうから。ここに座って」
社長らしきデブが言う。そいつが指差したのはみかん箱だった。
「あ、あの・・・これ冗談ですよね？」
「いやいや、真剣だよ。ほら、早く座って！コレ今日中に仕上げてね」
俺が半ば強引に座らさせられると、みかん箱の上に俺の身長並の高さの山積みにされた紙が乗せられた。これを今日中に仕上げろというらしい。
「ちょっと・・・正気ですか？みかん箱潰れちゃってますけど・・・」
「いやいや、真剣だってば。じゃあ宜しく」
そう言って社長は自分の席（みかん箱2つというちょっとグレードの上がってるやつ）に戻った。
「はぁ・・・やっぱりこんなところだったのか・・・」俺はしょうがなく仕事にとりかかる。

これからこの紙と永遠に戦いを繰り広げていくというのかと思うと、俺は泣きたくなった。

――――１６時間後――――

「っふー・・・やっと終わったし・・・」俺はやっとの思いで仕事を終えた。
気付けば、従業員らしい１名はもう仕事を終え、帰ってしまったらしい。
やはり仕事に慣れると手際もよくなるようだ。

「よし、よく頑張ったな。今日は帰っていいぞ」デブは言った。

「はい・・・さようなら・・」俺は人生に絶望しつつも、家へと帰っていった。

それから俺の死闘が始まった。

毎日山積みにされる書類を仕上げる。これで１６時間はかかる。
もちろん、休憩なんてものは無い。そんなことをしている時間がもったいない。

そして・・・ついに給料が手に入った。

「今月はよく頑張ったね。これが給料だよ」俺はデブから茶封筒をもらった。

「よっしゃあああああ！これで俺も大金持ちだ！」

俺はいままでの辛さが一気に吹き飛ぶような気がした。

俺は恐る恐る中身を見る。

そこにでてきたのは・・・・

「２５００円って・・・・なんじゃこりゃあああ！！」

俺が仕事恐怖症になった瞬間であった。――――

幕間　転生前の世界での出来事【出勤】（後書き）

他にもリクエストあったらお願いします！

幕間　転生前の世界での出来事【パン屋と俺】（前書き）

こいつも場所変えです。
面白くは無いと思いますが見ていただけるとありがたいです。

幕間　転生前の世界での出来事【パン屋と俺】

異世界に転生される前の俺には魔術を使えるような能力は無く、言えばただのダメ人間だった。

そんな俺は現在、ハードブラック会社で得体の知れない書類を仕上げる。

こんなもの一体何に使うのだろうか、とつくづく思ってはいるが社長は答えてくれない。

そんな俺にも昨日給料が入ったのだ！・・・高校生のおこづかいより少ないが・・・

「やっぱり毎日食事はしたいよな。でも一ヶ月をこの金でしのぐのは・・・」

俺は半分あきらめていた。しかし転職するあても無く、

もしも今の会社を辞めたら俺の給料が高校生のおこづかいから0までという大きな変化をとげてしまう。

「とりあえず、何に金を使うかを色々まとめてみようか」

俺は一ヶ月をこの極端に少ない収入で生活する方法をまとめてみた。

～一ヶ月で必要な物資を買う場合～

◆水道代

本来ならちゃんと水を使いたいところだ。しかし、こんなことにお金を使っている余裕は無い。

「公園の水を使えば問題ないよね」俺はまず一つの壁を乗り越えた。
水道は使わなくても生活していけるだろう。

◆ガス代
これも生活の上ではまず欠かせない存在だろう。しかし、俺には金の余裕が無い。
「ガスは必要ないな。ガス使うもの買わなければいいんだし」また俺は壁を乗り越えた。
しかし、これで大幅に食事の選択肢が減ってしまった。セロリとかしか買えないだろう。

◆電気代
これはマジ必要。コレが無いならもう生活じゃねぇええ！！って感じなものだ。
しかし、今の俺に電気代なんてものは払えない。
「いらないよなー。だって仕事から家に帰ってきたらもう寝るしあ、あとレンジとかも使わなければいいんだよな」
電気代を0円にすることにより、加熱という選択肢は無くなった。
更に冷蔵庫も使えないので、食材の保存もできなくなってしまった。

◆食費
これだけは乗り越えられない壁である。俺が人間である限り避けて通れないものだ。
「よし・・・これに全額を注ぐしかないよな」俺は確信した。
しかし今までの節約により、加熱、長期保存という選択肢が消えた。
「もう俺にはセロリと共に生活するしか選択肢はないのか・・・」
俺があきらめかけた時、一筋の光が見えた。
「パ、パ、パ、パンの耳ならもらえる！！」

そう、パン屋では大概はパンの耳を捨てたり、お客様にあげるものだ。
つまり、そのパンの耳を貰う事ができたら食費は0になるかもしれないのだ。
しかし、この作戦には難関がある。

それは、パン屋のパンの耳を与える条件だ。
一番嬉しいのは、パンの耳をただで好きなだけ持ってっていいと言ってくれる店だ。
これならその店に暫くは寄生できる。

二番目は、一つだけだぞ、って言ってくれる店だ。
この店のパターンなら一日分は確保できるであろう。
しかし、次から貰える見込みは無い。だから一度きりと考えるのが無難だろう。

そして最悪のケースは、「あーすいません、パンの耳はパンをお買い上げの方に1個差し上げるっていうシステムになっているんですよ」だ。
これがきたら、「やっぱいいです」っていうことが精神的にできなくなってしまう。
つまり、強制的にパンを買わないといけないフラグが立ってしまうんだ。

「とりあえず大まかな作戦は立てられたな。明日から実行だ！」
俺はとりあえず寝ることにした。

――――次の日――――

「今日は決戦の舞台だ！」俺は公園でトイレ・水分補給を済まし、決戦の舞台へと舞い降りた。

「いらっしゃいませ。」無愛想な男の店員が言う。これはかなりの難関かもしれない。
しかし、後には引けない。まずは店員を気をよくさせることからだ。

「あなたのつくったパンってありますか？」

「・・・メロンパンです」無愛想に言う。

「あーこれ凄くおいしそうですね！この焼き加減、表面のこげ具合、香り・・・
全てが完璧ですよ！」

「やっぱりそう思いますか！」先程までの無愛想な店員がまるで別人かのように変わった。
それから、俺は店員と1時間以上メロンパンについて話をした。
ここらへんで交渉してみてもいいんではないのか、と思い俺は話をきりだす。

「ちょっとお願いがあるんですけど・・・」

「なんですか？」彼は目を輝かせている。これはチャンスだ。

「パンの耳を分けていただけませんか？」

「・・・・・・・」

「あ、あの・・・・」

「帰れ！！！」

「ひぃぃぃぃ！すいませんでした！」俺は急いで外へでようとする。
その時、店員が俺の腕を掴んでそっと袋を渡した。

「何も言わずに立ち去れ」
その中には、大量のメロンパンが入っていた。

「あ、ありがとうございます！！！」
こうして俺の収穫祭は幕を閉じたのである。

P，S
俺、メロンパン好きじゃないんだよね・・

幕間　転生前の世界での出来事【パン屋と俺】（後書き）

感想・評価お待ちしています！

俺、人生初の恋愛体験（４０００メイル）（前書き）

今回はハーブがヒロユキに告白しちゃう話です。
結ばれるべきか・・・結ばれないべきか・・・・
まだ結末考えてません！

俺、人生初の恋愛体験（４０００メイル）

――――目線：広幸――――

俺は昨日、荒稼ぎをした。それをハーブに自慢したら、デートに行くはめになってしまった。

「せっかくの金がぁ・・・」俺は今日の朝食は贅沢しないで、この前の報酬でもらった薬草を食べていた。（あ、ドレッシングとか無いからめっちゃ苦いよ）

そして俺は約束通り、重い足を動かし、ギルドへと向かった。

「もぅー遅いー！」ハーブは約束時間まであと１０分もあるのにギルドに来ていた。

もちろん、俺は周囲から冷たい視線を浴び続けている。

「は、早くいこうぜ・・・ここはダメだ！」そう言って俺はハーブの腕を掴んでギルドを後にした。

ちなみに俺達が今向かっているのは、『ガルダス』という街だ。

その街はなんと言っても魔術書が大量に発行されている場所であり、初心者魔術から精霊などの扱う大技魔術、補助魔術・回復魔術などなど幅広いジャンルの魔術書が雑貨屋に置いてあるのだ。今日お金に余裕があったら買うことにしよう。

・・・まあ、余裕があるとは思えないんだが・・・

さっきはらハーブは雑貨屋にある、ブレスレットばかり見ている。

ちなみに額は、3万メイル前後である。ありえないほど高い。

しかし、これだけ高いのには理由がある。
ここの店にあるブレスレットは、全て『魔法石』から形成されておるのだ。
ちなみに図鑑によると、魔法石というのは魔物の体で偶然できる石で、
石には魔力が込められており、装備している者の魔力を増大させることができるらしい。
あと、強い魔物であればあるほど魔法石に込められている魔力が大きくなるのだ。
もちろんその魔法石の方が値段が高いのだが・・・

「ヒロユキーこのブレスレットが欲しいんだけどぉー」
ハーブが指差したのは赤い魔法石でできたブレスレット。イグリュスの魔法石らしい。
値段は・・・4万メイル。二つ買うと7万メイルらしい。

「無理だ。そんなに俺も払えないわ！」俺はこればっかりはキッパリと断る。

「・・・・ダメ？」またもやハーブの上目遣い。俺の心は一瞬揺らいだが、決意は変わらなかった。

「ダメだ！」俺はもう一度断った。

「えぇーお願ぃー」ハーブは俺に抱きついてきて言った。
その時に二つの柔らかいものが俺の肌に当たる。その瞬間俺の心は折れた。

「・・・しょうがないな。今回だけだぞ」・・・とうとう言ってしまった。

「やったぁー！じゃあ二つお願いします」そうハーブは言って、店員にブレスレットを渡した。

「ちょ！一つでいいだろ！」

「ダメだよ！こっちの方がお得だし！それに・・・」

「それに？」俺は聞き返す。

「やっぱり・・・お揃いの方がいいもん！」ハーブは頬を赤くして言った。

その瞬間、俺の興奮ゲージがＭＡＸへ到達し、危うく失神しそうになった。

しかし、会計をすると同時に俺の興奮ゲージが０にまで落ちた。

「お会計、７万メイルになります」

「・・・」俺は無言で大金を支払う。このお金を渡す時間がとてつもなく辛い。

俺は金を支払い終えた後、雑貨屋を急いであとにした。

もしこれ以上雑貨屋の中にいて、またハーブが欲しい物を見つけたらおしまいだからな。

「やったぁー！ヒロユキとお揃いだぁー！」ハーブはブレスレット

を腕につけていった。
もちろん俺も強制的にブレスレットをつけることになる。
まあこれをつけることによって魔力が上がるから悪くは無いよね。
そんなこんなで俺は全財産の９０％ちかくを失った。
しかし、その後もデートという名の金の無駄遣いは続いた。
遊園地の中へ行き、クレープを食べたり、観覧車に乗ったりなどなど・・・
結局夕方になった頃には、俺の全財産が４０００メイルにまで減っていた。

「ヒロユキー今日はありがと！」ハーブはにっこり笑って言った。
その笑顔を見た瞬間、８万メイルの支出が屁でもないように思えてしまった。

「俺も楽しかったよ。また今度行こうな。」もちろん、社交辞令だ。

「うん！・・・ヒロユキ、私言いたいことがあるの！」

「ん？なんだ？」

「あ、あの・・・そ、それは・・・」ハーブの顔がだんだん真っ赤になっていく。

「どうした？熱でもあるのか？」やはり俺は恋愛経験０だ。
後から考えてみると、自分でも有り得ないほど鈍感だな、って笑えてくる。
しかし、まだ俺はハーブの言おうとしていることがわかっていなかったので、こんな簡単なことにも気付けなかった。

「ヒロユキは、ハーブのことどう思う？」ハーブは目をそらしながら言ってきた。

「普通に、好きかな」この時、俺はハーブのことを友達として好きと言ったんだ。
しかし、ハーブはそれを別の意味でとらえたらしい。

「ハーブをヒロユキのことがすき！だから付き合ってください！」

「・・・え？」俺は聞き返した。

「いや、付き合ってほしいって言ってるだけだよ」ハーブの顔はまだ真っ赤だ。

「・・・ちょ、ちょいちょいちょいちょい・・え？罰ゲームかなんか？」
俺は思わず疑った。それもそのはずであろう。
俺はルックスは中の下、頭はとてつもないバカ、運動音痴、恋愛経験０で、
自分のためなら手段を選ばないダメ人間の代表だぞ。それがこんな美少女を付き合える筈がない。

「ハーブはいつでも本気だよ！ヒロユキは確かにブサイクだし、バカだし、鈍感だし、運動音痴だし、恋愛に対してかなりのチキンだし・・・でも・・・」

頼む・・・もうやめてくれ！俺のガラスのハートがもうボロボロだ！

「でも・・すっごくやさしい人だと思う！だって７万メイルもするプレゼントを普通の人なら買わないよ？それにヒロユキは貴族なわ

けでもない、でもハーブのために買ってくれるなんて凄く嬉しかった。
だからハーブはヒロユキのことが好きになったんだ・・・どうかな？」

「わかった・・・気持ちは嬉しいよ。でも、もう少し考えさせてくれないかな・・・
俺は恋愛経験０だもん。本当にハーブを幸せにできるか・・・」

「・・・わかった！じゃあ明日聞かせて！」ハーブはそう言って走って帰ってしまった。
そりゃ恥ずかしかっただろうな。帰っちゃうのも当然だ。

「俺は・・・」俺は歩きながら考えていた。
自分みたいなダメ人間にハーブを幸せにすることができるのか？
自分みたいなダメ人間がハーブと付き合ってもいいのか？
俺は、自分がダメ人間に生まれてきてしまったことに後悔した。
もしも、ダメ人間じゃなかったら答えなんて迷わない。
もしも、ダメ人間じゃなかったらハーブを苦しませることはない。
もしも、ダメ人間じゃなかたらこんなにも自分に落胆することもない・・・

「やっぱり俺は・・・」気付くと俺の家の前だった。
そして、俺は決断をした。明日ハーブに本心を明かす。そう決めた。

――――目線：ハーブ――――

本当に告白しちゃった・・・やっぱり恥ずかしかったな。

きっとヒロユキはいきなりで驚いてると思う。そして、もの凄く悩んでいるんだと思う。

本当は言いたかったんだ。ヒロユキはダメ人間なんかじゃないって。ハーブがゴブリンの群れに襲われた時も、弱いくせに助けにきてくれた。

今日だって、ハーブを楽しませようと一生懸命だった。

やっぱり、ヒロユキはすっごく優しいよ。そんなヒロユキが一番好きなんだ。

・・・だから、明日はちゃんと返事してよね・・・

◆◇◆◇◆◇◆◇◆

残高：８万４０００メイル

収入：０メイル

支出：８万メイル

―――――――――――――――

合計：４０００メイル

◆◇◆◇◆◇◆◇◆

俺、人生初の恋愛体験（４０００メイル）（後書き）

書いててハーブがかわいいと感じてしまった・・・

感想・評価お待ちしています！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5527z/

転生した異世界で金を荒稼ぎ

2011年12月26日23時17分発行